



# ハワイ人のジレンマ : ツーリズムのもたらしたものの

奈良, 雅美

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2004-09-30

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3175

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003175>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 170 】

氏 名・(本 籍) 奈良 雅美 ( 兵庫県 )

博士の専攻分野の名称 博士(学術)

学 位 記 番 号 博い第506号

学位授与の 要 件 学位規則第5条第1項該当

学位授与の 日 付 平成16年9月30日

【 学位論文題目 】

ハワイ人のジレンマ ―ツーリズムのもたらしたもの―

審 査 委 員

主 査 教 授 アレキサンダー・ロー

教 授 土佐 弘之

助教授 木村 幹

## 論文内容の要旨

本論文は、ハワイ人の視点からハワイにおけるツーリズムを検討したものである。すなわち、ハワイを事例にとりあげて、ツーリズムの基盤となったものを歴史的に検討しつつ、それぞれの時代にツーリズムが及ぼした影響を見ていく。そのなかで特に注意が払われるのは、古くから先住民としてハワイに居住している「ハワイ人」の問題である。ハワイ人の生活や文化に、ツーリズムはどのようなインパクトを与えたかを検討し、ハワイ人の手によるツーリズムへの試みを取り上げ、今後の展望について言及する。ツーリズム研究のなかで経済的なアプローチ、あるいは文化人類学的なアプローチをとるものが一般的であるのに対して、本論文は歴史的なアプローチを中心に、政治、文化、エスニシティなどの側面に着目し、ハワイという地域におけるツーリズムを多角的・複眼的に取り上げていることが特徴の一つである。また、ハワイにおけるツーリズムをハワイ人の権利回復運動などと関連づけながら動態的に分析する国際関係論的研究は他にない。

筆者は1996年に大阪大学法学部法学科を卒業後、神戸大学大学院国際協力研究科に入学し、「エコツーリズム：自然との新たな出会い」と題する論文で修士後（国際学）を取得した。学会活動も行っており、今までの研究成果には次のようなものがある。1998年8月日本平和学会研究セミナー、2001年3月日本平和学会研究セミナー、2004年7月日本国際文化学会にて研究報告を行っている。また、1999年には財団法人アジア太平洋刊行交流センター主催「第5回観光に関する学術論文」奨励賞を受賞している。また社会活動として、1999年4月から一年間、泉佐野市観光振興懇話会委員を務めている。

さらに、2001年9月には「ハワイ諸島をめぐる人の移動の歴史」と題する論文で博士論文資格審査に合格し、国際協力研究科教授会で承認されている。博士論文には、この論文が含まれている。本論文は、「序」と結論部分に相当する「結び」を除いて、2部構成となっている。第一部、「ハワイにとってのツーリズム」と第二部、「ハワイ人へのツーリズムのインパクト」はそれぞれ3章から構成され、合計8章の論文となっている。本文は143頁である。末尾には、4頁の表（ハワイの略史）、4頁の図の他に17頁からなる参考文献がつけられている。以下、論文の概要について説明する。

第1章「序」ではまず、先行研究の紹介や「ハワイ人」、「ツーリズム」といった用語の解説を行い、全体の構成を提示する。それと関連する形で、本論文のタイトルにあるハワイ人のジレンマについても説明する。ハワイにおけるツーリズムやそれにかかわるメディアはフラやアロハ・スピリットなど、ハワイ人を表すイメージを用いるが、それはハワイ人の文化を正しく提示するものではない。しかしながら、そうしたツーリズムのなかで作り上げられたイメージはツーリス

トをハワイに呼ぶことに成功し、ツーリズム経済を支えているものである。ハワイ人はそのようなツーリズムの中にいるが、経済的な恩恵をはじめ、土地の問題や政治的地位など、ツーリズムによってさまざまな悪影響も受けている。ハワイ人はたしかに植民地化される過程においてさまざまな悪影響を受けてきており、現在はその権利回復のための運動が盛んになってきている。文化を失うきっかけのひとつとなったツーリズムは、現在のハワイ人が先住民として自らの文化を取り戻すに際して重要な役割を担っていると筆者は主張する。この主張は、本論文の特徴のひとつである。

第2章では、ツーリズムとは何かという問題について、さまざまな側面から検討を加えている。まず、ツーリストを送り出す側の問題として、時代や地域によって、誰が旅（ツアー）にでかけることができるのかといった点について着目する必要性を説くと同時に、ツーリストを受ける側の問題として、何をどのようにして見せるのが重要であると指摘している。送り出す側、受け入れる側双方について見る限り、ツーリズムはある意味で格差によって成り立つものであり、支配関係のほかにジェンダー、エスニシティ、階級に着目する必要があるというのが筆者の主張である。

第3章では、歴史的なアプローチを取り入れて、1778年にジェームズ・クックが初めてハワイに上陸したときから、ハワイ人にとって来訪したさまざまな人々が及ぼしたインパクトを見ていく。さらに、白檀貿易、捕鯨、サトウキビやパイナップルなどのプランテーションから軍事基地まで、それぞれの産業が、どのようにしてその後に芽生えてくるツーリズムのための基盤になったかを説明する。ハワイにはツーリズムが偶然にやってきたわけではない。政治的、経済的、文化的要因があって、それらの複合的な結果として、ハワイはツーリズムのために最適な場所となった。と同時に、ハワイ人にとって、ハワイが住みにくい場所になったのである。

第4章では、第3章で論じてきたようなことを踏まえて、ハワイにおけるツーリズムそのものを取り上げる。時代別にわけて、王国時代の「旅」から始まって、ハワイにおけるツーリズムの展開を説明する。19世紀末から20世紀初めにかけて、ハワイを訪れるツーリストたちは大型客船に乗り、経済的にも時間的にも余裕のある人々に限られた。しかし、戦争になると多くの兵士のためのレクリエーション施設が必要となった。ツーリストだけでなく兵士に非日常的な時間を提供するために、売買春を含めているいることが試みられた。さらに1970年代から1980年代になると、日本人ツーリストが多くなってくる。ここではハワイ州観光局の報告書などといった一次資料を使用し、日本人とアメリカ人ツーリストの志向を比較する。短期滞在の日本人は消費活動やマリンスポーツを楽しむのに対して、アメリカ人はアリゾナ・メモリアルやビショップ博物館といった文化施設にも興味を示す傾向にある。

本論文の第2部は第5章から始まる。まず、第5章では、ハワイ人はどのようにしてツーリズムの中で使われてきたかを明らかにする。19世紀や20世紀初めの小説や万国博覧会などで伝えられたイメージに着目する。とくに、ハワイにおけるエスニック・ツーリズムの事例として、フラを取り上げる。ハワイ社会において、フラの踊りとチャントは重要な意味をもっていたが、宣教師によって禁止された。しかし、ツーリズムが盛んになってくる中で、フラは再び重要視され

はじめたが、意味は全く違っていて、政治的、宗教的意味ぬきのパフォーマンスとなった。また、ハワイ文化のみならず、モルモン教団が経営するポリネシア文化センターというきわめて大きなツーリスト・アトラクションも取り上げる。同センターは、ハワイ文化のみならず、ポリネシア文化を紹介するためのものだが、それはさまざまなフィルターを通った「文化」である。

本章の後半では、州の下院議会資料などの一次資料を駆使しながら、ハワイ州のレベルで、ツーリズムのなかのハワイ人はどのように見られたかを分析する。この分析によって見えてくることは、「彼ら」(they)から「我々」(we)というハワイ人に関する用語の変化が示すように、ハワイ人の存在が次第に重要視されてきた。そうした動きと連関するような形で、政策レベルにおいても、ハワイ人やハワイ文化を守る必要が指摘されるようになったという。

第6章では、今までみてきたツーリズムはハワイ人にとってどのようなインパクトを与えているかが取り上げられている。ツーリズムが盛んになるにつれて、ハワイ人は土地を失い、社会的・経済的地位が低下する。例えば、ハワイ人の失業率は他のエスニック・グループに比べて高く、職種も単純労働の分野が多い。また教育水準でみても、例えば大学卒業した人の割合は、他のグループよりハワイ人は少ない。またハワイ人の社会的、経済的、政治的地位は、白人や日系人といったエスニック・グループの人々より低い。本章の後半では、ホテル建設やリゾート開発のため、ハワイ人がどのようにして土地から切り離されてきたかについて、事例を交えながら説明する。そして最後にハワイに住むところを失った人々がアメリカ本土へ移住する傾向も示す。

第7章では、このようにして周辺化されてきたハワイ人はどのように対応、抵抗しようとしているのかが示されている。特に強調されるのは、ツーリズムに関連するハワイ人の主権回復運動である。例えば、1970年代に日本でも行われた「Please don't visit Hawaii」運動やカマ谷の開発に対する反対運動がその例である。さまざまな団体の資料を使って、ハワイ人の「当事者」がツーリズムや土地についてどう発言しているのかを明確にする。さらに、ハワイ人の手によるツーリズムの試みとして、「ハワイ人のホスピタリティ協会」(Native Hawaiian Hospitality Association)の活動を紹介する。「伝統的なハワイ人の文化」が希薄化しているなか、同協会はハワイ人の文化をツーリズムの中に取り入れるように努力している。オーストラリアのアボリジナル・ツーリズムを事例に引きながら、ハワイ人の手によるハワイ・ツーリズムの可能性に期待をよせる。

最後のまとめは第8章で行う。ハワイ人は自らの文化をツーリズムを通して「売る」ことによってはじめて経済的な恩恵を受けられる、といったハワイ人のジレンマは、ハワイ社会の構造や植民地支配にも起因するもので、ジレンマを解消することは容易ではない。しかしながら、ツーリズムは、ハワイ人にとって自立のための方法・手段となりうる可能性もある。この可能性を十分に発揮できるかどうかは、今後のハワイ人にとって大きな課題である。筆者は、ハワイ人のホスピタリティ協会の試みのように、ハワイ人にとってより良いツーリズムを追求していくことがハワイ人のジレンマを解決する方法であると結論づける。

以上が、論文内容の要旨である。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、日本ではあまり研究されてこなかった先住ハワイ人とツーリズムの関係を明らかにすること試みたもので、次のような意義をもつものと思われる。

第一に、本論文は歴史的なアプローチをとりながら、ハワイにおけるツーリズムをハワイ人の視点から紹介するものとして、今までに日本に紹介されてこなかった、新しい「ハワイ」像を明らかにするものである。すなわち、ハワイについての研究には観光地としての経済的な分析や、先住ハワイ人の権利回復運動についての社会的な分析はあっても、ツーリズムの基盤となったものと、その中に生きてきたハワイ人を一緒に取り上げたものはない。

第二に、上述したことに関連するが、本論文はツーリズムを複眼的な視角からツーリズムを考察することで、新しい「ハワイ」像を、より立体的に描くことに成功している。ハワイにおける文化の政治学的動態を歴史的な変化の中で捉えるといった学際的なアプローチを採用することによって、今までのステレオタイプ化された「ハワイ」像を打ち破ることに成功しているといえる。また、ツーリズムによるハワイ人のジレンマを浮き彫りにしながら、ツーリズムそのもののさまざまな側面や社会的意味を明確にした。こうした分析によって、経済的現象としてのツーリズムのみならず、社会的・政治的・文化的現象としてのツーリズムの問題を提示した。このことは、今までのハワイ研究やツーリズム研究を深める役割を果たすと思われる。

第三に、ハワイ・ツーリズムに関する一次資料を含めて、ハワイに関連する日本語または英語の膨大な関連文献を渉猟し、それを手際よく整理した上で、幅広い視野を生かしながら執筆されている論文であり、学際的なアプローチの有効性を証明したものともなっている。とくに実証面においては、ハワイにおけるツーリズムのもつ多様な側面を、さまざまな角度から描くことに成功している。また理論面においても、エスニシティ、階級、ジェンダーなどが幅濫・交錯している状況を描くことを通じて、方法論的多元主義とでも呼ぶべき、一つのアプローチのあり方を提起している点で、注目に値する。

第四に、先住民とツーリズムの研究には、ツーリズムに対して批判的であり、インパクトの分析は悪影響にしか着目しないものが多いが、本論文はツーリズムのポジティブな側面にも着目している。特に、ハワイ人の権利回復運動を促したものとして、ツーリズムのポジティブな面を示している点、また、ハワイ人がツーリズムと共生できる道をさぐる姿勢は、特徴的である。

このように、本論文は、ハワイにおけるツーリズムに関する研究の中で独自の特徴をもっており、先住民の視点から見たツーリズムという意味でも意義深い論文である。ただし、本論文がいくつかの問題点を孕んでいることも否定できない。以下、そうした問題点のいくつかを指摘しておくたい。

第一に、本論文では分析枠組みとして、歴史的なアプローチをベースに植民地支配による社会的インパクトを検討しながらも、その説明を十分にできていないように思える。豊富な実証的情報に対して、より有効な分析・解釈を与えるには、より整理された理論的枠組みを模索する必要がある。ツーリズムを既存の概念より幅広いものとして捉えて、それを提示しようとしている

努力は認めるが、その複眼的視点のそれぞれの要素をより深く掘り下げ、自らの提示した枠組みにつなげる作業を強める必要があると思われる。

第二に、本論文はハワイ人の運動をツーリズムと関連付けようとするあまり、先住民運動の広がりや、アメリカにおける公民権運動などに十分注意を払っていないように思える。今後は、ハワイの中の要因だけではなくて、ハワイの外での要因に着目する必要がある。そうすることによって、ハワイ人のアイデンティティ形成やそのアイデンティティの活性化をよりダイナミックに説明することができるであろう。

第三に、第二の問題にもつながるが、本論文のオリジナリティをより明確にするために、さまざまな概念の意味や意義をより丁寧に説明する必要がある。ツーリズムやハワイ人の曖昧なところを切り捨てるのではなくて、むしろそういったところを積極的に指摘することによって、現実により近づくことができよう。たとえば、ジェンダーの概念を用いてはいるが、細かい分析になってくるとジェンダーに注意を払っていない。「ハワイ人」の捉え方には、男性・女性といったジェンダーの違いのほかに、ハワイ諸島のそれぞれの島に所属意識をもっていることで、一枚岩の「ハワイ人」にまとめることの妥当性についてもっと検討すべきだったと思われる。

これらの問題点ないし疑問点があるとはいえ、すでに指摘したような博士論文の学術的意義を大きく損なうものではないし、むしろ、今後の研究生生活において留意してほしい点である。

以上を総合して下記の審査委員は、全員一致して本論文の提出者が博士（学術）の学位を授与されるにふさわしい十分な資格を有するものと判断し、審査結果を合格とするものである。

2004年9月1日

|    |     |             |
|----|-----|-------------|
| 主査 | 教授  | アレキサンダー、ロニー |
|    | 教授  | 土佐弘之        |
|    | 助教授 | 木村幹         |